

知の「広さ」／知の「深さ」

——H. ブルーマーの概念論を手がかりに

The "Width" of Knowledge / the "Depth" of Knowledge :
A Sketch of H. Blumer's Discussion on the Genericness of Concepts.

内 田 健
UCHIDA, Ken

はじめに

「社会学 sociology」とは「社会 society」を研究するディシプリンである、ということになっている。世界各地の教育機関で毎学期開講される社会学の概論的な授業では、「社会」とは何かについて、各種の定義が披瀝されているはずだ。私も社会学の授業担当者として、その時点までに煮詰めた「社会」の定義で概論の口火を切ることになっている。

現段階で、私なりの「社会」の定義は、「交際や集合をとおして人と人のあいだ（人-間）に生じるプロセスと、それが生み出す事象の総体」に落ち着いている。ここで「交際」とは集団や組織といった枠組のなかでの人びとの《恒常的な交わり》を含意し、「集合」は群集や行列や街の雑踏といった人びとの《一時的な集まり》を含意する。ただし、何が「交際」で何が「集合」かは、推移的に同定するほかない。《恒常的な交わり》の大半は、《一時的な集まり》のおおよそ安定的な反復をとおして、不断に、ないし間欠的に、再生産されている。

私の考えでは、こうして定義される「社会」の特質のなかで、とりわけ重要なのはつぎの三点である。

第一に、「社会」は複雑 complex である。二者関係 dyad のようにもっとも単純にみえる「社会」現象ですら膨大なパラメーターが関与することで成立しており、リニアな因果連関の特定（「A を原因として B が結果した」式の説明）はまず不可能であるとみなしなければならない。

第二に、「社会」は創発特性 emergent property をもつ。任意のどの「社会」を取りあげるにしろ、そこで観察される事象は要素還元的なアプローチによっては決して捕まえない。ゲシュタルト心理学の表現を借りると「全体はつねに部分の総和以上の何ものか」である。したがって、「個人」に遡及する「社会」の説明は失敗に帰着する。むしろ、「個人」そのものは「中間的規模のマクロ構成体」として扱われるべきものである（Collins 1987:200=1998:130）。

第三に、「社会」は再帰的 reflexive である。「社会」的な出来事についての知識は当の出来事に織り込まれ、後続する出来事の回路づけ、抑止、ないしは方向転換を促す。そればかりか、

先行する出来事の記憶すら、再構成のために適用される解釈枠組によって複数の記述可能性を許す。「予言の自己成就／自己破壊」と呼ばれる事態は、「社会」の再帰性の代表的な発現形態としてしばしば引き合いに出されるものである。

これらに加えて、「社会」にはもうひとつ、目に見えない、という特性もある。チャールズ・レマートが指摘するように、(最広義の)社会構造は「決定的に不可視であり *irrevocably invisible*」、「それじたいを観察することはできず、データから再構成するほかないもの」である (Le-mert 2003: xv 強調は原文)。

複雑性、創発特性、再帰性、不可視性。これらの特性を備えた「社会」は、追尾し、捕捉すべき対象としては相当に手強い相手である。「社会」の観察はいかにおこなうべきか。「社会」の理論をいかにして構築したらよいか。社会学の方法をめぐって縷々展開され、今日まで命脈を保っている議論はいずれも、「社会」という対象の手強さがかつぷり組み合って、これらの問いに挑んだ仕事だとみなすことができるだろう。

本稿では、この問いに挑みつづけた社会学者のひとりであり、「シンボリック相互行為論 Symbolic Interactionism」という学統を主導した人物でもあるハーバート・ブルーマーのテキストを手がかりに、かれが問いをどこまで突き詰めたかを見定め、同時に、かれがかならずしも明示的に答えずに遺した課題の在処を探ってみることにしたい。

「社会」の観察および理論構築の方途にかんするブルーマーの議論の中心には、つねに「概念 concepts」の使い方という問題が位置づけられている。当然、それには相応の理由がある。

ブルーマーは1928年にシカゴ大学に提出した学位論文『社会心理学の方法』の冒頭の一節で、世界を「科学的に」とらえようとする際に踏襲すべき必須の手続きは知覚世界の「縮約変換 a simplifying transformation」であると述べている (Blumer 1928: 2)。複雑で多種多様な要素が明確な区画も施されずに渾然と現象している世界を可知的 intelligible な対象として同定するには、空間的／時間的な「分離 separation」という作業を欠かすことができない。ブルーマーの考えでは、この分離の作業にあたって駆使されるツールが概念にはかならない。

ブルーマーの考えを敷衍すれば、「社会」を観察する適切な方法、あるいは「社会」についての適切な理論を構築する方法を探るということは、「社会」を適切に縮約変換するための方途を探索することにほかならない。この課題をさらに突き詰めれば、縮約変換の首尾を左右する用具としての概念の適切な使い方を吟味＝批判する作業に行きあたる。その意味で、社会学の方法をめぐるブルーマーの思索が概念の問題を中心に組織されていることは至当である。

私の考えでは、概念をめぐるブルーマーの所論は、①概念をいかに「感受的に sensitizingly」使うか、②いかにして「類普遍的な generic」概念¹⁾をつくりあげるか、③「常識概念 common-sense concepts」と「学術概念 scientific concepts」とをどのように架橋すべきか、の三つに大別できる。

ここでは②の問題、すなわち「類普遍的な」概念をめぐるブルーマーの所説を組上に乗せよ

う。ブルーマーは、「社会」分析の方法をめぐる長年にわたり書き継いだテキストのなかで、類普遍的な概念の構成を飽くことなく唱道した。そうしたブルーマーの議論に触発されながら、シンボリック相互行為論の立場からする「社会」分析では、こんにちに至るまで「類普遍性 genericness」への志向が連綿と継承されている (e.g. Couch 1984 ; Prus 1996 ; Schwalbe et al. 2000)。

本稿では、ブルーマーが類普遍性に示したこだわりを切り口に、その概念観の一端を検討することにしたい²⁾。

1. 類普遍的な概念とは何か

まず、ブルーマーのテキストにおける「類普遍的」という形容詞の用法の検討からはじめよう。あとでみるように、ブルーマーは数多くの論文でこの形容詞を使っている。ここでは用例検討の素材として、出現頻度がもっとも高いテキストのひとつ、1966年に発表された「社会開発という概念」(Blumer 1966)を取りあげる。この論文で「類普遍的」の前後に配置されている類義表現と反義表現は下表のとおりである。ここでは、用例を二つの系列で整理しておきたい。

第一の系列に、概念が包摂する事柄どうしの関連の性質を指示する表現がある。類普遍的な概念とは、「普遍的な」「一般的な」「一般化された」「抽象的な」「共通性をもった」事柄どうしの結びつきを示す表現である。それは、「異質な」「多様な」「ちぐはぐな」「矛盾しあう」「ばらばらの」「錯雑した」「曖昧な」事柄を束ねることによっては決して構築することができないものである。

第二の系列に、概念の適用範囲を指示する表現がある。類普遍的な特性を備えた概念は「広範かつ一般的な適用が可能」であり、「どんな社会、文化、制度でも生起しうる」事態の捕捉に適している。他方で、類普遍的な特性を欠く概念は「時間、空間、主題にきつく縛りつけられて」いるために「時間的にも地理的にも文化的にも、極度に限定的な適用範囲」しかもたない。

表 generic の類義表現と反義表現 (Blumer 1966より抽出。()内は頁を示す。)

類義表現		反義表現
common ⁽³⁾ , universal, general ⁽⁷⁾ , abstract, generalized ⁽⁸⁾	⇔	vague, confused ⁽³⁾ , diverse, inconsistent, contradictory, disparate, divergent ⁽⁴⁾
allow for wide and general application ⁽⁷⁾ , might take place in any society, culture, or institution (10-11)	⇔	narrowly bound in time, space and substance, very restricted temporal, geographical and cultural application ⁽⁷⁾

このような意味が込められた「類普遍的」という表現がどのような論脈で登場するのか、ほかのテキストも見わたしながらさらに具体的に確認しておこう。ブルーマーの論点はおおよそ三つにまとめることができる。

第一に、類普遍的な概念は、共通の性質をもとに分離 separate・同定 identify され、明確に識別できる distinguishable まとまりを備えている。この特性は、実り多い知見の産出に向けた研究対象の設定をおこなううえで不可欠な条件である。

任意のクラスを構成する経験的項目を研究し、そのクラスにかんして一連の一般化を展開しようとする科学的な営みを自認する以上、クラスの同定が必要であることはあらためて指摘するまでもなからう。クラスの同定により、当該のクラスに内属する実例と内属しない実例とを識別できるようになる。そうして、研究対象の類普遍的な性質の輪郭が描き出される。類普遍的な研究対象が識別可能になれば、研究の焦点となる対象が定まり、その対象についての研究を前にすすめられるようになる (Blumer 1948:542)。

態度概念は驚くほど広範な具体的実例を包摂しているが、経験的研究を通して分離された類普遍的な特徴をなんらもっていない。識別可能な対象のクラスを指示してはいないのである (Blumer 1955:60)。

類普遍的な変数を欠けば、変数分析はバラバラでまとまりのない知見しか産出しない (Blumer 1956:684)。

第二に、類普遍的な概念は、抽象性を備えており、一般化された知見を産出することに寄与する。個別具体的な事例の記述から理論的考察へと踏み出すうえで、概念が抽象的な特性をもっていることは不可欠の条件である。

類普遍的な変数、すなわち、抽象的なカテゴリーを表わす変数…… (Blumer 1956:684)。

[研究者たちは、社会的不安の個別具体的な事例に関心を示すことはあっても、] 社会的不安の類普遍的な分析にはほとんど関心を払ってこなかった。社会的不安の所与の歴史的事例や類型にかんするかれらの研究は、一般化された知識をほとんどなにも産みだしてはいない (Blumer 1978: 2 [] 内は引用者)。

第三に、類普遍的な概念は、広範囲の適用性を備えており、事象の遍在的性質を浮上させる。これは、特定の時間的、空間的、文化的諸条件の拘束から自由な知見を産出するうえで不可欠

な特性である。

社会学的調査研究における変数の大部分は……ほとんど例外なく特定の時間、空間、文化に縛りつけられており、類普遍的な社会的カテゴリーの明確な実例として用いるのは不適切である (Blumer 1956:685)。

[社会開発の概念は、] いかなる種類の人間社会にもそれを適用可能とするような類普遍的な性質をまったく付与されていない (Blumer 1966:7 [] 内は引用者)。

用例から推察するかぎり、ブルーマーの考えでは、概念が類普遍的であるためには以上三つの条件が満たされていなければならない。これらは同時に、「社会」の実効的な理解に寄与する知見の産出にとって欠かすことのできない条件でもある。

2. 「類普遍性」の基底的条件(1) —— 外延の包括性

前節で引いたテキストの断片にも端的に示されているように、ブルーマーが類普遍的な概念や分析の意義をくりかえし説いた背景には、かれの目前で展開されていたアメリカ社会学の調査研究において、それらの重要性に見合った十分な注意が払われていないという情勢認識があった。よく知られているように、ブルーマーのテキストは際だってポレミカルな特質を備えている。この論件をめぐる開陳された主張でも、例に漏れず、類普遍的への志向を欠いた「社会」分析に対し、徹底して批判的な姿勢が貫かれている。

たとえば、変数分析の限界を論じたテキストでは、類普遍的な特性をもたない以下にあげる三種の変数が論難の標的になっている (Blumer 1956:684)。

- ① 「最高裁に対する態度」「共和党員に投票する意思」等々の変数。これらは一群の事象を包括する用語 class term であるが、任意の歴史的・文化的状況に結びつけられているため類普遍的とは言いがたい。
- ② 「社会統合」「同化」「権威」等々の変数。これらは抽象的な社会的カテゴリーを表わすものであるが、個別の調査研究では対象や問題ごとにバラバラの指標を用いて分析されるため、類普遍的な知識の蓄積に資するところがない。
- ③ 「性」「年齢」「出生率」などの変数。これらも①に属する変数と同様に同一の意味を明確に共有する class term であり、人間の集団生活に普遍的に適用できるが、実際の適用にあたっては「〇〇における出生率の推移」といったかたちで局所化 localize されるため、類普遍的な性質を失ってしまう。

前節でみたブルーマーのテキストにおける「類普遍的」の用例と照合するとき、こうした批判には一種の困惑を抱かざるをえない。ここでブルーマーは、①であげられている変数には「共

通の性質」が、②に属する変数には「抽象性」が、③のリストにある変数には「共通の性質」および「普遍的な適用可能性」が、それぞれ備わっていることを認めながら、そのすべてに対し類普遍的な変数としての欠格を宣告していることになるからだ。

一書をかけてブルーマーの提唱した方法論の含意を批判的に検討したケネス・パウは、ブルーマーのこうした主張はとうてい支持しがたいと断じている。パウの論点は、「外延が制限されている概念であっても、原則として意図に適う内包をもつかぎりで、普遍として適格である」(Baugh 1990:72)という一節に集約されている。かれのみるところ、「内包」を共有する、つまり共通の「意味」をもつ概念は、それじたいで十分に類普遍性であるための要件を満たしているとみるべきであるのに、ブルーマーの議論は、類普遍性の構成要件を「外延の包括性」にもとめ、しかもその要件の充足にあまりにも高いハードル——あらゆる人間集団への適用可能性——を課しているために、具体的な調査研究場面でのフィジビリティをほとんど担保しないものとなっている。とりわけ、上記の①と③についての指摘は支持しがたい。

たしかに、class term であっても類普遍的な特性を備えているとはかぎらない、という主張には、すっきりと腑に落ちない点がある。OED (2nd Edition) における 'generic' の語釈の筆頭に "Belonging to a genus or class; applied to a large group or class of objects; general (opposed to SPECIFIC or SPECIAL) ; esp. in *generic character, name, term.*" とあるように、字義的な観点からみると、generic term と class term とを区別する根拠は乏しい。

しかし、パウの論評は、はたして的を射当てているのだろうか。常識的に判断すれば至極妥当に映るパウの論評は、かえって、かれの解釈における charity の精神の欠如、つまりブルーマーのテキストの可能性の中心を探りあてようとする姿勢の欠損を露呈しているように私には見える。なるほど、ブルーマーの方法論的要請はしばしば、調査実践者にとってあまりにも厳格すぎるように映る。たとえば、「普遍的な適用可能性」にかかわるブルーマーの規準は、実際の調査行為のプロセスでは多少とも緩めたかたちで適用せざるをえないだろう。だがそれにしても、パウの論評は、焦点があてられているトピックを、ブルーマーの論脈からあまりにも性急に引き剥がしてしまっているように思えるのだ。内在的な観点に踏みとどまってブルーマーの行論に十分な注意を払えば、かれが class term そのものではなく、そうした用語の使い方が問題になっていることは容易に読み取れるだろう。すなわち、該当箇所におけるブルーマーの所論は、ある用語がなんらかの共通特性をもつ事象を包摂する class を指示すること、別言すれば「外延の包括性」を具備することは、類普遍性の成立にとっての必要条件ではあっても十分条件とはいえない、という主張として解すべきである。

3. 「類普遍性」の基底的条件(2) —— 内包の精察

それでは、ブルーマーの考える類普遍性の構成要件のうち、十分条件に相当するのは何か。私の考えでは「内包 content の精察」がそれにあたる。類普遍的な概念を構築するには、外延

の包括性を担保するだけにとどまらず、内包すなわち概念の内容について十分な検討を加える作業が欠かせない。これが、概念の類普遍性にかんするブルーマーの議論の核心にある主張である。

ブルーマーが長年にわたって書き継いだテキストの各所では、雑多な事象を無造作に寄せ集めてラベルを貼りつけただけの「合切袋」的な概念に自足する姿勢に対する批判がくりかえし登場する。数例を引いておこう。

大半の概念の用法は、ラベルのほか何も生み出さないラベリング labeling without yielding anything but the label でしかない (Blumer 1931:532)

態度概念がこのように経験的に曖昧である結果として、その概念はたんなる論理的な、つまり概括的な [= 雑多な要素を一切合切盛り込んだ乗合馬車のような] 用語 an omnibus term になっている (Blumer 1955:60 [] 内は引用者)。

社会開発の概念は、曖昧でちくはぐな内包を抱え込んだ恣意的なラベル an arbitrary label にすぎず、類普遍的な指示対象をまったく欠いている (Blumer 1966: 4)。

こんにちの社会学者たちは、社会開発の概念が何を意味するかについての明確な考えを明らかにもっておらず、無関連の諸研究を包含し、曖昧な思考状態を隠す、見栄えのよい見出し語 a prestigious rubric としてこの概念を使用しているのである (Blumer 1966:11)。

これらの断片は、ブルーマーの考える類普遍的な概念の構成要件を裏返しのかたちで語っているものと解することができる。つまり、類普遍的な概念は、「恣意的なラベル」「ラベルではないラベル」「概括的用語」「見栄えのよい見出し語」といった表現で指し示されている用語法の対極に成立するものである。あれこれの事象を粗雑に概括しただけの見出し語に、類普遍的な事象の把握への貢献はとうてい期待できない。

では、概念が「合切袋」の状態に陥ることを回避するためにふまえるべき手続きとはどのようなものか。すでに何度か参照した論文「社会開発という概念」(Blumer 1966)においてブルーマーは、共通する性質をもった概念内容の抽象に先だって、「背景概念 background notion」を分節し明確にする分析的省察を丹念に積み重ねることを推奨する。

社会学者は概して、社会開発の概念 idea をすっかり自明視することに甘んじている。あたかも当の概念に自明の意味と妥当性があるかのように。嘆かわしいことに、類普遍的なプロセス、すなわち社会的事象の共通形式 common form of social happening を同定するのを感じ

ないものたちは、社会開発の概念 notion を曖昧な状態に放置し、恣意的な「操作化」をはかろうとする (Blumer 1966: 4)。

現在広くおこなわれている社会開発の操作的定義にみられる紛れもない欠陥は、それらが「操作化」しようとしている当の事柄が何かにかんしての背景観念が、曖昧で不正確だということである (Blumer 1966: 6)。

これらの箇所から読み取れるのは、概念の意味や妥当性を自明なもののみなし、概念に包摂させる事象の「共通形式」の抽象を統制する「背景観念」を精査する手続きを省こうとする態度への批判であり、生煮えの概念を操作的に定義し、調査データへと性急に適用する傾向への批判である。ブルーマーの考えでは、「概念が何を意味するかについての明確な考え」をもたずにすすめられる「社会」的事象の「実証的な」調査研究は、いくら嵩高く積み上げられたとしても、当の事象の類普遍的な知見の蓄積には一向に寄与しない。

同じ論文では、「背景観念」との互換性を有する表現が、くどいと感じるまでにくりかえし登場する (() 内は頁を示す)。「共通理解 common understanding」「合意された規準 agreed-upon criteria」(4)「背景的構想 background conception」「統一かつ安定的な構想 uniform and stable conception」「基底的構想 fundamental conception」「合意された分析規準 agreed-upon analytical criteria」「超越的条件 transcending condition」「基礎づけをもつ標準ないし規準 grounded standards or criteria」(6)「共通の参照点 common reference points」「基本的合意 basic agreement」(7)「分析の基本尺度 analytic benchmark」(8)といった語群がそれらにあたる。

ひとつの概念がカバーすべき内容として何を繰り込んで何を排除すべきかについて、概念を構築し、使用するものが周到かつ説得的な「構想 conception」⁽³⁾を提示することではじめて、類普遍的な特性を帯びた概念が創発する。「背景観念」の精察、つまり概念を構成する要素、ひとつの概念が包摂する内容を精選することによって「統合的なイメージ unifying imagery」(Weller 2000:80)を描き出す作業こそが、類普遍的な概念構築にむけて踏襲すべき不可欠の手続きである。

それでは、ブルーマー自身はこの方法論的要請をどのようなかたちで具体的に実践したのだろうか。その事例として、ここでは「ファッション」を論じたテキスト (Blumer 1969) を取りあげてみよう。この論文の「ファッションの類普遍的な特徴 generic character of fashion」と題したセクションでは、「ファッションの出現に不可欠な条件 essential conditions」として六項目が列挙されている (Blumer 1969:285-287 傍点は引用者)。

①変動を含んでおり、そこにかかわる人びとに、旧来の習慣・信念・愛着を見直し、ないし放棄し、新しい社会形式を採り入れる用意があるような領域であること。②新しい社会形式の

モデルないし素案の周期的な提示に開かれている領域であること。③複数の社会形式のモデルから比較的自由に選択をおこなう機会が担保されていること。④功利主義的ないし合理主義的な考量によってモデル間の価値序列が決められないこと。⑤競合するモデルのいずれかにお墨付きを与える、威信をもった人物たちの存在。⑥(a)当該領域の外部の出来事がもたらすインパクト、(b)当該領域への新規参加者の加入、(c)当該領域内部の社会的相互行為の変化、のそれぞれに呼応した新たな利害関心や傾向の発現に開かれている領域であること。

これらが、ブルーマーの考える——より正確に言えばブルーマーがこのテキストを書いた時点で考え抜いたかぎりでの——「ファッション」概念の「背景観念」に相当する。ブルーマーは六項目を数えあげた直後に、「六つの条件が満たされているとき、そこにはかならずファッションの作用が見いだされるはずだ」(Blumer 1969:287 傍点は引用者)と書いている。これらの条件群に「不可欠な essential」という形容詞を冠していることと考え合わせると、これはきわめて強い物言いである。六つの条件がすべて充足されなければ「ファッション」現象は起こらないし、逆に六条件が充足されるときにはかならず「ファッション」現象をみとめることができる、という主張にほかならないのだから。

むろん、こうして提示された「ファッション」概念をめぐる考察の妥当性については、議論の余地が十分にあるだろう¹⁴⁾。どんなテキストも、いったん公開されたあとは、あらゆる角度からの批判的検討にしがう。ブルーマーが構築した「ファッション」の概念も、その例外ではない。原理上、さらに類普遍的な概念に改訂される余地は無限に残されている。

ともかく、ここで確認したいのは、ブルーマーは具体的な概念の構築・使用に際して、みずから打ち出した方法上の要請に確かにしがっている、ということである。ある現象の発生に不可欠な条件、その充足が必然的に当の現象の発生に帰結するような条件をすべて盛り込んだという確信が得られるまで、背景観念=構想をじっくりと煮詰めること。それが、ブルーマーにとって概念に類普遍性を与えるために不可欠の作業だった——その確信の当否については後続の議論に委ねられるのは無論だとしても。

前節で取りあげたブルーマーの論点、すなわち、ある概念が class term であることは、当の概念が類普遍性を備えていることを保証しない、という主張は、こうした読みによれば十分に了解できるものである。ブルーマーにとって、任意の概念が類普遍的であるか否かの判定は、個別の概念の「外延の包括性」といった観点から即座にくだすべきものではなく、一つひとつの概念が適切で十分な構想（「内包の精察」）を経て構築されているか否かの検証をまって、はじめて可能となるものだった。すなわち、類普遍性は概念の構想を規制する理念として位置づけられているのである。

概念の構築に際して開示される構想は、当の概念を適用した「社会」の理論的説明の妥当性・説得性を判断するうえでもっとも重要な手がかりを提供するものである。だからこそ、「概念のテスト」というアイデアを切り口としてブルーマーの概念論を検討したジャック・ウェラー

が述べているように、「ブルーマーが論じる概念は、ひとつの定義でその意味を伝えるにはあまりにも複雑すぎる。ひとつの概念の意味を伝えるにも、詳細な議論といくつかの補足的な用語が必要とされるのである」(Weller 2000:76)。

概念を論じることは、その概念で東ねようとする事象を過不足なく表現する様式を模索することにひとしい。方法をめぐるブルーマーの議論で概念構築に格別の待遇が与えられているのは、かれがそれを「社会」を理論的に把握する作業の中核に位置づけていたからにはほかならない。

4. 固有性 distinctiveness と類普遍性の両立——ブルーマー概念論のアポリア

ブルーマーは、学位論文『社会心理学の方法』の一節で、エルンスト・カッシーラーの『実体概念と関数概念』から「概念は、もしもそれが考察の出発点にあたる特殊の事例の〈消去 Aufhebung〉にすぎず、いわばその固有性の無化 (Vernichtung) を意味するというのであるならば、すべての価値を失ってしまうだろう」(Cassirer 1910=1979:7) という一文を引いたあとに、こう書いている⁽⁵⁾。

抽象化、すなわち普遍 universals の形成は、ユニークなもの the unique のもつ豊かな個別的内容を意味の乏しい一般的内容へと変換し、ユニークなものを消去することではない。むしろ、普遍 the universal は個体 the individual を補完する。つまり、普遍は個体に、引き算ではなく足し算を施すのである (Blumer 1928:349)。

この文は、「概念の外延 extension の拡大は内包 content の縮減を必然的に伴う」という考え方をしりぞけ、普遍についての知はユニークなものについての理解の改善に寄与すべきものであると論じる文脈に置かれている。ブルーマーは、カッシーラーの「関係論的な概念観」の特質を、「普遍とは、個別の実例から何かを抽出する extracting or withdrawing のではなく、当の実例とほかの要因とのあいだの新しい関係を表象するものである」ととらえる点に見だし、その発想に「付け加えるべきことはない」と全面的な賛意を表明している (Blumer 1928:348-349 強調は原文)。

通常、論理学では、概念の外延を拡大することは概念の内包の縮減を意味し、逆に概念の内包の拡大は概念の外延の縮減を意味する、と教えられる。この考え方にしたがえば、対象の個性の包括的な捕捉に固執する概念は広範な事象への適用を断念することで成り立つ。そこでは知の「広さ」と「深さ」とがトレードオフの関係に置かれる。ブルーマーはここで、概念構築にかかわるそうした常識的な論理に「関係論的な概念観」を対置し、対象の普遍的特性の把握は、当の対象の個性・固有性のより精確な表現を可能にするかたちで遂行されるべきだと説いている。つまり、「広く」知ることが「深く」知ることを補助するように概念を使うことは

可能だと主張しているのである⁽⁴⁾。

私は、ブルーマーの「感受的概念」をめぐる議論を、《対象に固有の表現様式を忠実に描出するように、柔軟に概念を使用せよ。》という指針と解する(内田 2003)。これに対し、本稿で検討した「類普遍的な概念」をめぐる議論は、《対象の類普遍的な表現様式を探りあてるような綿密な構想を土台として概念を構築せよ。》という指針として解することができるだろう。

対象の固有性の尊重と普遍性への志向という「二羽の兎」を同時に捕捉することを可能ならしめる概念の構築。「社会」の適切な縮約変換に寄与する概念の使い方をめぐって書き継がれたブルーマーのテキストは、学位論文で設定したこの挑発的な課題に応答する試みとして読むことができる。

それでは、ブルーマーはみずから提出した問題に満足のゆく答案を書くことができたのだろうか。私の考えでは、ブルーマーの答案には重大な不備がある。それは、「感受的な概念」と「類普遍的な概念」とにかんする論述がそれぞれ別個に展開され、互いの関連が明確に分節されないままに残されたことである。

かれの教え子のひとりであるアンセルム・ストラウスによるつぎのコメントは、その欠落を的確に衝いている。

……ほかの点では鋭敏なこの人物[ブルーマー]は、私の考えでは重大な錯誤をおかしている。ほかの箇所ではあれほど重視している科学理論の重要な特徴、すなわちパターンとヴァリエーションとの関係を、ブルーマーはつかみ損ねている。……私の考えでは、概念を多次元化する dimensionalize ことができること、多次元化すれば個別的な特性の布置連関を備えた一つひとつの事例 individual instances with their unique constellation of properties を概念が指示するパターン全体と関係づけることができることを、ブルーマーはついに理解することがなかった (Strauss 1996:17 強調は原文。[]内は引用者)。

ストラウスが述べているように、ブルーマーは概念をめぐる書き継いだテキストにおいて、パターン＝類普遍性を見いだすことの重要性和ヴァリエーション＝固有性に執着することの重要性をめぐるそれぞれは現在でも再読に耐える議論を提出する一方で、両者の相互関連については、管見のかぎり学位論文で示唆した論点を展開し掘り下げた論述は残していない。残念ながら、現在入手可能なブルーマーのコーパスのなかでこの件にかんじてかれが遺したもっとも明示的な記述は、上で引いた学位論文の一節だったと断じざるをえない。

しかしそうは言っても、《「深さ」と「広さ」をふたつながら備えた対象記述の様式と方法の模索》という課題じたいの魅力が色褪せるわけではない。この課題を設定したブルーマーの功績は、やはり特筆に値する。上の引用文でストラウスが言及している「概念の多次元化」というアイデアを含む「データ対話型理論 grounded theory」アプローチにしても、ブルーマーが

敷設した方法論的基盤のうえに築かれた成果のひとつに数えられるものである⁽⁷⁾。

すべての問いに答えはしないが、問うべき問いの在処をもとめて不断に参照されるテキストを「古典」と呼ぶとするなら、ブルーマーのテキストにもその資格は十分に備わっている。残された広大なテキスト空間から有望な原石を発掘し磨きをかける仕事は、私たちに残されている。「深さ」と「広さ」とともに備えた「社会」の理論的記述を実現する方法論の精練もまた、未完のプロジェクトのリストに書き加えられるべき一項である。

註

- (1) 'generic' 'genericness' に適切な訳語を充てるのは難しい。本稿では那須壽（那須 1985）にしたがい、それぞれ「類普遍的」「類普遍性」を充てることとする。
- (2) 「感受的」概念の問題については別の機会に検討した（内田 2003）。「常識概念」と「学術概念」の相互関係については稿を改めて論じる。なお、ブルーマーが「シンボリック相互行為論」という表題を掲げて提示した理論的パースペクティブの特質については、いくつかの機会に論じた（内田 1992；1994；1996）。
- (3) ブルーマーは、問題状況に直面した行為者が状況の打開にむけておこなう経験の省察や活動戦略の方向転換といったプロセスを「構想 conception」と呼び、「概念 concept」をそうした構想の結晶体として位置づけている。この点のより詳細な説明は、（内田 2003:57-58）を参照。なお、井上達夫は、「正義 justice」の「構想」と「概念」とにかんして、奇しくもブルーマーと同様の区別を立てて議論を展開している（井上 1997:117-120）。井上によれば、「正義概念」が「正義という理念の意味そのもの」であるのに対し、「正義構想はこの理念の様々な場面（分配・制裁・補償・交換など）における適用基準……を明示・特定し、その正当化を試みるものである」（井上 1997:118）。なお、井上による両者の区別については野崎綾子の著作に教えられた（野崎 2003:49 注⁽¹⁾）。
- (4) ブルーマーの「ファッション」論の意義と限界を指摘し、自分自身のものを含む後続の諸研究が形成する文脈にブルーマーの議論を位置づけた内在的な批判として、かれの教え子のひとりフレッド・デイヴィスの論稿（Davis 1991）を参照。
- (5) この箇所が存在は、ロバート・プールの著作に教えられた（Prus 1996:131-132）。
- (6) ブルーマーの提示する方法論の特徴を「個性記述的なアプローチ」とだけとらえるのはあまりに一面的な評言である。ブルーマーは明らかに、「個別の（個性記述的な）事例の水準にとどまるべきであり、一つひとつの実例はそれじたいについてのみ理解することができる、と主張する人びと」とは立場を異にしている（Prus 1996:131）。
- (7) ストラウスは最初期の論文で、学術概念としての「態度 attitude」は内包の定義にかんする合意形成すら不可能なほど混乱した状態に陥っていると論評したうえで、日常会話における「態度」の用法分析から抽出される「中核的意味 core(s)」を手がかりとして、学術的な「態度」概念の再構築をはかるべきだと論じている（Strauss 1945）。このテキストには、ブルーマーの影響がはっきりと刻印されている。以後のストラウスの仕事は、ブルーマーが提示した方法論上のアイデアを質的な調査研究で実行可能な手法 method へと変換する方途を探った試行錯誤の軌跡としても読まれるべきだろう。

引用文献

- Baugh, Kenneth. 1990. *The Methodology of Herbert Blumer: Critical Interpretation and Repair*. Cambridge University Press.
- Blumer, Herbert. 1928. *Method in Social Psychology*. Unpublished Ph.D. Dissertation. Department of Sociology, University of Chicago.
- . 1931. "Science without Concepts." *American Journal of Sociology* 36:515 – 533.
- . 1948. "Public Opinion and Public Opinion Polling." *American Sociological Review* 13:542 – 549.
- . 1955. "Attitudes and the Social Act." *Social Problems* 3:59 – 65.
- . 1956. "Sociological Analysis and the 'Variable'." *American Sociological Review* 21: 683 – 690.
- . 1966. "The Idea of Social Development." Pp. 3 – 11 in *Studies in Comparative International Development* vol. 2, edited by Irving L. Horowitz. Washington University.
- . 1969. "Fashion: From Class Differentiation to Collective Selection." *The Sociological Quarterly* 10:275 – 291.
- . 1978. "Social Unrest and Collective Protest." *Studies in Symbolic Interaction* 1:1 – 54.
- Cassirer, Ernst. 1910 = 1979. 山本義隆訳『実体概念と関数概念』みすず書房.
- Collins, Randall. 1987. "Interaction Ritual Chains, Power and Property: The Micro – Macro Connection as an Empirically Based Theoretical Problem." Pp. 193 – 206 in Alexander, Jeffrey C. et al. 1987. *The Micro – Macro Link*. Univ. of California Press. (= 1998. 内田健訳「相互行為儀礼の連鎖・権力・所有権——経験に基礎づけられた理論的問題としてのマイクロ-マクロ結合」石井幸夫ほか訳『マイクロ-マクロ・リンクの社会理論』新泉社: 119 – 138.)
- Couch, Carl J. 1984. "Symbolic Interaction and Generic Sociological Principles." *Symbolic Interaction* 7:1 – 13.
- Davis, Fred. 1991. "Herbert Blumer and the Study of Fashion: A Reminiscence and A Critique." *Symbolic Interaction* 14:1 – 21.
- 井上達夫 1997. 「〈正義への企て〉としての法」『岩波講座現代の法15 現代法学の思想と方法』岩波書店: 107 – 139.
- Lemert, Charles. 2003. "Goffman's Enigma: Series Editor's Foreword." Pp. xi – xvii in Treviño, A. Javier ed. *Goffman's Legacy*. Rowman & Littlefield.
- 那須 壽 1985. 「社会運動論再考のために——H. ブルーマーの集合行動論をめぐって」『社会科学討究』 30 – 3: 203 – 234.

- 野崎綾子 2003.『正義・家族・法の講造変換 リベラル・フェミニズムの再定位』勁草書房.
- Prus, Robert. 1996. *Symbolic Interaction and Ethnographic Research: Intersubjectivity and the Study of Human Lived Experience*. State University of New York Press.
- Schwalbe, Michael et al. 2000. "Generic Processes in the Reproduction of Inequality: An Interactionist Analysis." *Social Forces* 79:419-452.
- Strauss, Anselm L. 1945. "The Concept of Attitude in Social Psychology." *The Journal of Psychology* 19:329-339.
- . 1996. "A Partial Line of Descent: Blumer and I." *Studies in Symbolic Interaction* 20:3-22.
- 内田 健 1992. 「H. ブルーマーのルート・イメージ —— シンボリック相互行為論の立論構成」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 (哲学・史学編)』別冊19:59-71.
- . 1994. 「シンボリック相互行為論のコンテクスチュアルな読解に向けて」『人間科学研究』7-1:53-63.
- . 1996. 「マイクロマクロ問題 —— 相互行為論からのアプローチ」『人間科学研究』9-1:101-113.
- . 2003. 「H. ブルーマーにおける「概念」の問題——感受的概念をめぐって」『社会学史研究』25:55-70.
- Weller, Jack. 2000. "Test of Concepts in Herbert Blumer's Method." *Social Thought & Research* 23:65-86.